

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典  
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経緯を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典  
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典  
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典  
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学委員編 B5 一八〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 六〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 一八〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸以他編 B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 幸雄編 B6 一八〇〇円

隠語辞典 堀井 実典編 B6 一八〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井 幸雄編 B6 一八〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井 幸雄他編 B6 一八〇〇円

難訓辞典 中山 幸雄編 B6 一八〇〇円

名乗辞典 荒木 良雄編 B6 一八〇〇円

名数数詞辞典 森 啓彦編 B6 一八〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 甚朗編 B6 一八〇〇円

新版ことば遊び辞典 鈴木 幸三編 B6 一八〇〇円

類語辞典 鈴木 広田編 B6 一八〇〇円

類義語辞典 徳川 富島編 B6 一八〇〇円

表現類語辞典 藤原 亨一他編 B6 一八〇〇円

新版文章表現辞典 神島 村松編 B6 一八〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741-2

季刊 連句 第37号



俳諧連歌三千卷 (南柏雑記 35) .....	1
平成三年の連句界 .....	東 明雅 ... 2
歌仙四卷 春炬燵..... (東 明雅・草間時彦・平井照敏) .....	4
春深し..... ( 捌 東 明雅 )	
弥生尽..... ( 捌 原田千町 )	
海棠..... (坂本孝子・式田和子・大窪瑞枝)	
二十韻 夜長 (捌・文 秋元正江) .....	8

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第四十一回猫養会 .....	10
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻 藤祭 捌 式田和子	
文 冠 亀戸天神社奉納正式俳諧 式田和子	
第二部 二十韻 八卷 捌 東 明雅・倉本路子・桑原美津	
下坂元子・下鉢清子・中川 哲	
原田千町・東 郁子	
文 文台袖 副島久美子	
初習い「配視役」顛末 岩井啓子	

養虫付勝練習二十韻 .....	東 明雅 ... 18
芦丈翁俳諧聞書 (IV) .....	20
二十韻五卷 .....	24
捌 式田和子・中川 哲・原田千町	
鈴木 茂・田村満子	

手賀沼連句会 .....	26
手賀沼張行記	
二十韻 八卷 捌 秋元正江・市野沢弘子・内田麻子	
式田和子・下鉢清子・鈴木千恵子	
中島啓世・福井隆秀	

雁帛往来 .....	29
新刊紹介 .....	25

表紙 (尾白鷺) 宮崎龍火子

# 俳諧連歌三千卷

## 南柏雑記 35

雅

先師芦丈翁は、生涯三千巻の俳諧を捌かれたという。何しろ、明治七年(一八七四)に生まれ、昭和四十三年(一九六八)に逝去されるまで、九十五年に及ぶ生涯のうち、既に二十一歳で馬場凌冬師の門に入って学ばれ、その連句歴だけでも、七十余年に及ぶのであるから、それはむしろ当然であろう。先師の歿后三年に出版した「学日記」の中で、故清水瓢左師はこのことにふれ、これは決して水増しの三千巻ではなく、むしろ割引の三千巻である事を実証しておられる。

昔の宗匠の中でも、たとえば昭和六年(一九三一)に六十一歳で歿した西尾其桃は、三千堂と号したが、これも三千巻首尾を誇ったの事であろう。費川他石(昭和十年一九三五歿)に至っては、生涯の作品七千巻というが、これは恐らく、前人未踏、空前絶後の大記録であるに違いない。

清水先生も、生涯三千巻達成に野心をもちやしておられたようである。昭和四十七年(一九七二)に出された先生の「この一年」という連句作品集には、その前年一年間に各地の俳友と対座、または文音によって風交された所産として、百二十余巻が収められている。この当時、先生は作品

二千巻と称しておられ、そのあと、昭和六十三年(一九八八)まで、十五・六年を豊饒として生きられたのであるから、すくなく見積っても三千巻は優にオーバーしておられるであろう。ともかく、清水先生ほど連句のお好きな方は私には知らない。面を合はせるとすぐ、発句を所望され、付合がはじまる。それは家の中だろうが、外だろうが所かまわずであった。あれは昭和何年の事だったか。伊賀の上野で俳文学会が開催され、ちょうど松本に来ておられた先生と同行したわけであるが、途中、列車の中、また旅館ではさらに人を集めて興行される。伊賀上野から名古屋に出た時などは、満員電車の中で、お互いに吊皮にぶら下りながら、付句を行っていたのであった。私も決して、嫌いではないが、この瓢左先生の根の好きにはつくづく脱帽したものである。

現在、私は猫養会で旅をする時、車内の席が定まるや否や、小短冊を取り出して、二十韻を強要する癖があつて、多くの輦燈を買っているが、これはまさに瓢左先生の影響である。

私は、生来の疎漏、折角、巻き上げたものを正確には記録していない。ただ、昭和三十六年に連句を始め、五十五年までの松本時代二十年間に凡そ四百巻、そして五十六年から今日まで柏の十年間は機会が多いので凡そ六百巻、計千巻には達していると思うが、どうであろうか。

# 平成三年の連句界

東 明 雅

この年、第六回国民文化祭ちば91連句大会が開催され、前年に劣らぬ盛り上りを見せた。この国民文化祭を通じて、連句が今まで不毛であった地方にまで広まって行く。その外、各種の行事や出版物も、前年に続き賑やかであった。考えてみればこの年は子規の俳諧革新からちょうど百年目にあたり、彼によって一旦は潰滅された俳諧（連句）が、百年にして漸くその呪縛から解き放された感のする充実した年であった。

## 一、行事

- (1)六月十五日 連句協会第十回全国大会が芝の増上寺会館で開催された。百二十余名参加、二十五席。
- (2)九月十四日 第三回全国連句新庄大会が、新庄市教育委員会・北陽社の主催で、同市市民プラザにおいて開催された。参加者七十余名、十二席。
- (3)十一月二十三日 第六回国民文化祭ちば91連句大会は、千葉市幕張メッセで開催。全国からの募吟八百五十一巻、

## 二、出版物

- ①作品集 東明雅著「新炭俵」（二月二十五日刊、角川書店）、猫養会編「猫養作品集I」（三月吉日刊）、内田麻子著「房連庵の連句」（三月十六日刊、むなぐるま草紙社）、窪田薫著「1990年の獅子料理」（六月六日刊、俳諧寺芭蕉舎）、貫井爽水著「句集爽水」（六月八日刊、卯辰山文庫）、くのいち連句会第七集「六歌仙花のさきがけ」（八月一日刊、くのいち連句会）、小松崎爽青著「爽青連句集」（十月三十日刊、永田書房）など、前年にくらべて、その数はややすくなかったけれども、それだけに粒ぞろいであった。
- ②連句論書・入門書 大岡信著「連詩の愉しみ」（一月二十一日刊、岩波新書）これは題名の示す通り、連句ではない新しい連詩というものの試みであるから、ここに引用するのは不当であるかも知れないが、もともと連句から出たもので、連句の何たるかを考える上に参考になり、また、外国人に連句を教える場合（一の◎参照）、その可能性を示唆するものでもあるので、敢てここに掲げた。入門書としては暉峻康隆・宇咲冬男共著の「連句のすすめ」（四月二十日刊、桐原書店）がある。両者の文音歌仙五巻の外、テレビ放映の三吟歌仙を解説している。

- ③連句年鑑・連句協会会報、年鑑の平成三年版は九月二十日刊。会報は隔月配布され、連句界の行事、作品を報道。
- ④主要連句グループ発行誌、連句研究会「連句研究」は十二月号をもって百号に達した。創刊から十数年に及ぶ阿

参加者三百余名、四十九席の盛会であった。

## (4)その他

- ①一月十五日 現代連句シンポジウムが飯田橋のホテルグランドパレスで開催された。八十余名参加。パネラー・ゲストと聴衆の間に熱心な討論が行なわれた。なお、この第二回は七月二十七・二十八両日、君津市の山荘で行なわれた。
- ②五月二十三日 故清水瓢左翁追悼の第三回青時雨忌が深川の芭蕉記念館で挙行され、多数の参加者があった。
- ③六月二十二日・二十四日、「日独俳句・連句交流シンポジウム」が、ケルンとフランクフルトで開催。宇咲冬男氏の講演と、フランクフルトでは実作もあった。
- ④七月二十一日 第五回連句フェスタ宗祇水が、郡上八幡大乘寺で挙行された。
- ⑤十月二十七日 第十九回俳諧時雨忌が飯田橋の家の光会館で開催された。五席。

片瓢郎氏の努力に敬意を表し、尚、今後一層の発展・充実を期待する。岡本春人「俳諧接心」は実に五百二十五号、東明雅「季刊連句」は三十五号である。大林柚平「都心連句」・柴崎正寿郎「句と連句」も健在、真鍋呉夫「水分」は八月第二号を出した。橋間石「白燕」、秋山正明「丹想」その他、國島十雨「獅子吼」、宇田零雨「草莖」、宇咲冬男「あした」、小松崎爽青「かびれ」、鍵和田穂子「未来図」などにも、毎月、連句作品、あるいは論説が掲載されている。

総合俳誌「俳句研究」は五月号に「現代連句の効用」と題する特集、その他、一月号・七月号・八月号・十月号・十一月号にも、それぞれ連句の記事が見られる。さらに、「江古田文学」（第十九号）は「現代の連句」を特集した。

## 三、消息

佳菊庵森月鼠氏が三月逝去された。九十四歳。深悼。新庄市北陽社では五月、金風軒苦舟（金沢兼雄）・一芯亭喜楽（熊谷喜一）・琴風軒茶香（山崎栄一）・露月庵恣風（村松幸栄）・秋光園葛子（浅沼栄太郎）の五宗匠が、また、猫養会では十二月、羅浮亭正江（秋元正江）・行々子庵平朗（杉江平朗）・桃径庵和子（式田和子）の三宗匠が、それぞれ立机された。





二十韻 夜長

秋元正江捌・文

肝臓をだましつづつ酌む夜長かな  
芋名月のてびねりの鉢  
鳥の声岬のはなを渡るらん

ボーイスカウトちよっと休憩  
パフォーマンス・パントマイムの帽廻す  
彼より先に犬と気が合ひ  
均等法嫁しては夫を従はせ

壺坂寺のきつい坂道  
まくなぎのまとひつきたるまひるなか  
びっくりり水をかけて冷麵

ごっつんとぶつかる長押のっぽの子  
落合選手夢の三億  
庭広しゆらりと泳ぐ人面魚  
水の闇に誘ひ込まるる

亡き女を恋ひつづつ仰ぐ寒の月  
組鐘ひびく教会の塔  
世界中どこもかしこも唯「行った」

縁に坐れば呆けそうな春  
風吹きて谷へ流るる花ぶぶき  
小さき村にかかる初虹

平成三年十月九日 起首  
平成四年二月二十六日 満尾  
於 新宿朝日カルチャー四十八階教室

明雅 正江 達子 和子 千町 庸子 淳子 澄子 杉亭 清子 美津 文子 安子 啓世 志げ子 利子 千雪 淑子

白菊や隣の家も老夫婦  
硝子戸を露流れをり十三夜

肝臓をだましつづつ酌む夜長かな

客発句、脇亭主に従い、明雅先生にお願いして発句を三句頂いた。その中から俳味溢るる「肝臓を」を頂く。

脇は発句が三秋なので仲秋の芋名月で季を定め打添付。  
3 鳥の声岬のはなを渡るらん 三秋 場

発句、脇が内の景なので第三は先ず聴覚から入って促されるように視線を移動させるような大きな景で転した。

4 ボーイスカウトちよっと休憩 他

岬の風景にボーイスカウトを点在させ、前句の岬、海、ボーイスカウトの色彩の動きが鮮やか休憩でストップした。1 パフォーマンス・パントマイムの帽廻す 他

裏に入って折立は前句を市街地に見立替えて、大道芸人の演技が終って帽子を廻している楽しい風景

2 彼より先に犬と気が合ひ 自

パントマイムの人混みには珍しい種類の犬も見物、ふさふさしている毛並を撫でているうちに彼女と意気投合。つまり彼の愛犬と彼女の出会いが先で、犬にひかれた彼女は次に飼主である彼と恋におちたのである。フランス映画の一コマのようだ。

3 均等法嫁しては夫を従はせ 自他

やさしいと思った彼女も現実の結婚生活では、均等法など無くて尻の下のもりだったのに、更にまた。

4 壺坂寺のきつい坂道 場

1 世界中どこもかしこも唯「行った」 他

組鐘から世界漫遊の思い出へ、しかし何処も唯「行った」は忘れられない名言の一句。

2 縁に坐れば呆けそうな春 三春 自

「呆けそうな」で老を危く救っているが、前句をかく受け春が効いている。

3 風吹きて谷へ流るる花ぶぶき 晩春 場

小さき村にかかる初虹 晩春 場

花の定座、挙句とも場の句で美しい自然を素直に付けた。

二十韻「夜長」の巻の山場を恋句の234、345に前者は破一段で洒落た恋、後者破二段は幻想的な恋句が付いた。3の付句には治定した句の他に次のような多彩な付句が出た。

庭広しゆらりと泳ぐ人面魚 晩冬 自他

わらはにたもれそちの魂 契りしもの蛇体なりしか 家出女の風邪で居続け 雪中中を人垣に見る 寒の牡丹の精に魅入られ

教室では三十名近い連衆がいっせいに付句を出して、それを黒板に書き一句を選ぶ。一巡のためわくわくするような付句を頂けない辛さがあったが逆にその条件の中で習作を超えるものが巻けたらと思う。出句の付味をじっくり鑑賞して一句に紋こむということはすごく興奮する作業であった。

「三つ違いの兄さんと…」で知られる『壺阪靈験記』、浪花節へ妻は夫をいたわりつ、夫は妻を慕いつつ…、の壺阪寺、正しくは南法華寺の坂道を出して前句に皮肉充分。  
5 まくなぎのまとひつきたるまひるなか 三夏 自  
まくなぎは糠蚊、めまといとも云い揺蚊の一種、一句を平仮名の八一調で、きつい坂道でのまくなぎ襲来を演出。  
6 びっくりり水をかけて冷麵 三夏 自  
前句のまくなぎを厨にもつてきて昼食の仕度の冷麵をゆでるびっくりり水にまくなぎも退散したと思う。

1 ごっつんとぶつかる長押のっぽの子 他  
厨に続く居間では栄養に恵まれて育った背の高い子が、長押といういまや古い物に抵抗したかの如くぶつかった。  
2 落合選手夢の三億 他  
よい体格とすぐれた運動神経は時代が夢の三億をももたらすのである。

3 庭広しゆらりと泳ぐ人面魚 場  
前句の三億から付句は豪華に鷹揚になったが人面魚は何かお金の功罪を知っているようだ。  
4 水の闇に誘ひ込まるる 晩冬 自他  
人面魚は実在するが誘ひ込まるるの妖しい雰囲気水の闇は現世かあの世かそれとも心象風景か。

5 亡き女を恋ひつづつ仰ぐ寒の月 三冬 自  
この月はまさに氷輪、冷たく輝いている。  
6 組鐘ひびく教会の鐘 場  
折しも教会のカリヨンが嫋嫋と響き供養となるのである。

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第四十一回 猫叢会

第四十一回猫叢会は四月二十六日(日)、江東区亀戸天神社事務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行奉納し、そのあと、二十韻八巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「藤祭」一巻  
第二部 二十韻八巻

## (一) 役割

宗匠	式田和子
脇宗匠	豊田好敏
副宗匠	内田麻子
執筆	副島久美子
知司	仏淵健悟
副知司	雑賀遊
同	市之沢弘子
座配	小林千雪
座見	下鉢清子
花司	上月淳子
配硯	若尾よしえ
同	橘文子
同	岩井啓子

## (二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆登場
- 六 文台捌
- 七 知司挨拶
- 八 俳諧興行
- 九 花前
- 十 玉串奉献
- 十一 花の句披露
- 十二 端作り
- 十三 吟声
- 十四 文台返し
- 十五 作品奉納
- 十六 知司挨拶
- 十七 退席

## 二十韻 藤祭

捌・文式田和子

## 冠 亀戸天神社奉納正式俳諧

振り仰ぐ瑞の反橋藤祭  
親猫仔猫眠る店先  
春炬燵宿題ひろげそのままに  
ピーと音してファックスを受け  
月中天鮎解禁の時近し  
白靴似合ふ同齡の女  
握られて引き寄せられてもうその気  
トクホンチールじんわりと効く  
宰相は会議続きでこっくりこ  
韓国政界ゆれる寒々  
登り窯綿入れの子に声をかけ  
高速脳は缶の山なり  
バイロンの口絵を照らす窓に月  
別わたしになつたこの秋  
蜉蝣の如くさらりと服を脱ぎ  
念仏講の回状が来る  
制覇せし七つの海を語る父  
オリンピックのメダル大きく  
盃の底に寿花の宴  
頬をなでゆく暖かな風

明雅 杉亭 正江 好敏 健悟 清子 弘子 麻子 淳子 雅代 千町 達子 澄子 一恵 哲 和子 執筆

亀戸天神社の藤祭りに正式俳諧を奉納することは、猫叢会恒例の行事となりまして、今年で六回目です。当日四月二十六日は快晴の日曜日。NHKでもこの藤祭りのことが放映された由で、亀戸ゆきのバスは超満員。境内もことのほかの混雑で、会場の社殿に入るのには盛りの藤の花房の間を抜け、反橋を渡るのですが、これがなかなか通れなかつたと連衆の頬も紅潮気味でした。

天神社殿もお宮詣りのご一家が列をなして、日柄は「友引」。そのおはらいの間を縫って奉納関係者一同正式参拝を済ませ、開始を待つ間列席の友人と挨拶を交す余裕も見られました。

奉納の正式俳諧は定刻、粛々と開始。花司の芍薬の朱が一きわ鮮かに、止め缺の音きつかりと響き、執筆久美子さんの紫の袴とよく映えて、端正な文台捌きにはのかな艶の漂うのは猫叢ならではのことと思えます。

正式俳諧奉納の日は、まだ道真公が大宰府にご蟄居のときと伺いました。

山わかれ飛びゆく雲のかへり来る影見る時はなほたのまれぬ。(道真公新古今集)

猫叢会の一巻おなぐさめになりましたでしょうか。どうか連衆一同の俳諧の上達お導き下さいませと玉串奉獻させて頂きました。







## 文台袖

副島久美子

吹く風も心地よく申し分のないお天気に恵まれて、藤祭り天神様奉納の正式俳諧は無事終了しました。

お囃子の太鼓の音やあふれんばかりの参詣の人々の賑わいも、ここ天神様の祭壇をしつらえた室内には少しも届かずしんと静まり返った全くの別世界、宗匠様の席入りから始って配硯、献花を滞りなく進行しいよいよ執筆の出番、深呼吸数回、文台に両手を掛けて立ち上り、後は毎日欠かさず一度は行った稽古通り順序を追って進める事が出来ました。文台捌き、下俳諧の読み上げそして句をお付け頂く方達もすらすらとお運び下さり玉串奉奠に続き宗匠様から花の句を頂戴してめでたく吟声に至りました。今回明雅先生お作の発句がとてども発声しやすく「振り仰ぐ」の「り」の音が上向きに伸びて行くところなど鳴竜ではないのですが、何か会場の四方の壁から響きが返って来る様な感じが吟声の間中しておりました。「振り仰ぐ端の反橋藤祭」の句意が

天神様に届いたのではないかとふと思った  
り致しました。

私は執筆の仕事の中で吟声のところが一番好きなのです。連衆の皆様がお作り下さった一句一句を味わい乍ら心を込めて吟じ上げる時気持ちよい幸せを感じたことでした。

思えば忘れもしません、一昨年松山連句大会旅発ちの羽田空港で明雅先生から「次の執筆に」のお言葉、あまりの思いがけない事に即時「はいお引受け致します」とはとてども御返事出来ませんでした。さあそれからは楽しさいっぱいである筈の旅行が素晴らしい景色にふれても「ああどうしよう」と時々ふっと執筆のことが頭をよぎる有様で憂鬱の気に覆われた二泊三日になってしまいました。さて旅も終り帰りのモノレールで折しも先輩執筆の秋元様、式田様と御一緒に「実はこれこれ」と申し上げたから「是非おやりなさい私達が助けてあげるから」と暖かく励まして下さり不安ながらやと勇氣が湧いてまいりました。

さてそれからは執筆という重しを頭に乘せての半年余りでしたが、暑さも峠を越した八月下旬練習開始、プリントの説明を読んでは一動作又その繰り返しと毎日少しづつ

練習、どうやら九月のリハーサルに臨むことが出来ました。何と言っても強力な助っ人は式田様に頂戴したビデオカセット、百聞は一見に如かずで再生のボタンを押しては納得、巻き戻しては練習と大いに助けられました。

初回深川の芭蕉忌の折は吾ながら初々しい気持で、二回め立机式の時はあまりの人の多さとお祝の熱気とで上り気味となってしまうました。それに引き替え今回の藤祭では淡々と自然体で運ぶことが出来ました。翌日着物の袖が文台袖の為に三角に折られていたのをほどこいて元に戻した時「ああこれ済んだのだ」と一仕事終えた感慨がゆっくりと胸に広がってきました。

もう十数年も前のことですが連句を始め以前大山の阿夫利神社で生まれて始めて正式俳諧を見学する機会を得てまるで夢の様な別世界と珍しくよそ事に思ったことでしたが、図らずも執筆という大役を三度もさせて頂きこの貴重な体験は私の人生の中で大きな財産となりました。

明雅先生、秋元様、式田様その他お世話下さった皆様に心から感謝申し上げます。有難うございました。

## 初習い「配硯役」顛末

岩井 啓子

「はいけんやく？」

昨年の夏、正式俳諧で配硯役を務める件で、秋元さんからお電話をいただいたとき、耳で聞いた言葉からは、それが何をやる役なのかわかりませんでした。

「お稽古をしますから、ご心配なく」の言葉に誘われて、「はい」と軽く受けてしまったものの、「お稽古をする」というからには、それだけの気配りがあるはず。簡単に考えてはいけなかったと、すぐ後悔しましたが、そのときはもう後の祭りです。

この冊子をお読みになる方の多くは、正式俳諧のことはもうよくご存知でしょうが、私が正式俳諧に接したのは、その年の春、亀戸天神の藤祭りで行われたもの一度きり初めての目には、執筆の文台捌きがただ珍しく、あの座り方は「歌麿」というのだと先輩方から教えられ、歴史の勉強をした気分でおりました。

あのとき、そういうえば整然と硯を運んでいた方々がいたけれど、あれは「配硯役」というのか……。ぼんやりした記憶をよみ

がえらせても、その役を自分が務める実感はわきません。それでも、一人ではなく三人一緒でするところに気を強くして、その役を体験してみることにしたのでした。

お役は一年続きます。その秋と今春の二回、出番がありました。秋の芭蕉忌にそなえ、まず九月初めにお稽古を半日。全体のリハーサルのほか、配硯の手順を、この役は二度目という若尾よしえさんをリーダーに、橋文字さんと三人で特訓しました。

イメージとしては、茶会で抹茶を運ぶような役……と感じていたのですが、実際にやってみると、動きはもっと複雑です。硯の持ち方・置き方、歩き方といった細かな所作を覚えるほか、三人の動きを揃えるのが大変。ほかのお二人に比べ、私は御辞儀がおろそかなのか、一人タイミングがずれてしまうのが困りました。

半日だけの練習では心配とあって、よしえさんから、以前の正式俳諧を撮ったビデオを拝借。文字さんと一緒に、全体の流れと動きをおさらいしたりしました。

そして本番——。最初の芭蕉忌では文字通り無我夢中。慣れない和服での正座に苦しんだこと以外は、ほとんど何も覚えてい

ません。でも、二度目となった今春の藤祭りでは、硯を下げる前に執筆の吟声を趣深く聞く余裕がもてました。

肝心のお役目のほうは、二度目のときも私の動きだけがずれたようでヒヤッとしたものの、後で、宗匠の式田さんはじめ一座の方々が「三人揃って、結構でした」と温かい言葉をかけてくださり、ほっと一息。初心の身にはある役で緊張もしましたが、終ってみると、見学しただけでは得られない充実感が懐かしく残ります。

雅かな文台捌きや朗々とした吟声を楽しむ正式俳諧には、茶室で湯の沸く音を聞くのに似た、味わいがあると思いました。

余談ですが、猫蓑会が正式俳諧を始めた頃に配硯役を務められた原田千町さんのお話では、配硯の手順は、当初と変えたところもあるそうです。一座する方がじっと待つ時間を少なくするよう、ムダな動きを省いて簡略にされた由。勉強にお借りしたビデオを見ると、撮られたときと現在では、配硯の手順以外にも少し違いがありました。

両方を比較すると、一つのセレモニーの型が出来上がる過程をたどるようで、これも面白い勉強になりました。

